1. ラテンアメリカ基礎知識の話

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

1・3人種構成について

あるコロンビア家族がいる。父親はスペイン系の白人、母親は黒人系。おそらく先住民か白人かと黒人系の「メスティソ（混血）」と思われる。彼らには二人の子供がおり、息子はどこから見ても黒人系、娘は白人であり、彼らが兄弟であると紹介されたとき、知識を持ち合わせてなかった私は「えっ？」とたじろいだ記憶があった。

混血とその進化

まず、ラテンアメリカ人というのは存在しない。ラテンアメリカ研究家の中川文雄氏は、次のように説明する。

> ペルーなどの中央アンデス諸国、グアテマラ、メキシコでは混血を含めて先住民の血統をひくものが最も多く、ブラジル南部、アルゼンチン、ウルグアイ、コスタリカでは白人が大多数を占め、またチリとキューバは白人人口が有色人口をやや上回っており、カリブ地域の大部分、ブラジル北歩粒の沿岸地帯では黒人とその混血の占める比率が高く、その他のところはメスティソと白人のさまざまな混血が、いずれも過半を占めることなく混在している。[(1)]

人種の構成は白人、黒人、先住民の他、メスティソ（白人＆先住民）、ムラート（白人＆黒人）、サンボ（黒人＆先住民）という呼ばれ方は一応存在する。ただ、現状はもっと複雑で多様化している。参考までに2007年にある研究所が行ったラテンアメリカ諸国の人口における人種構成を紹介する。[(2)]

種・国 (%)	アルゼンチン	ブラジル	チリ	グアテマラ	メキシコ	ペルー
白人	63	43	43	29	13	8
黒人	1	17	1	1	1	1
先住民	1	2	2	23	7	6
白人X黒人	8	17	6	8	7	10
白人X先住民	9	4	23	16	40	28
黒人X先住民	0	2	1	1	2	2
全ての混血	16	16	24	21	21	41
回答無し	3	0	1		1	4

人口構成の途上

ヨーロッパ人が現在のラテンアメリカに到着する以前に先住民が暮らしていたのにもかかわらず、ヨーロッパと異なりラテンアメリカ社会は相対的に新しく、未だ発展の途上段階であり、これからも変化を続けていくだろうと考えられる。当然、先進国と呼ばれる国々も人種構成の発展は続けているのであろうが、ラテンアメリカ諸国は自国の独自の文化の原型が確立しているかどうか。例えばフランス人やイタリア人は、言語、食文化など見ても、ルーツや伝統文化が明らかであろう。ラテンアメリカが新大陸、欧州が旧大陸と言われる所以かもしれない。また日本人の場合、日本の伝統文化も確立されていると思う。

スペインやポルトガルがいわゆる中南米に到着して以来16世紀から20世紀まで、大雑把に言及すると、人種の割合は変化し続けている。それは18世紀からのアフリカ、ドイツ、イタリア、アジア・オリエンタル系の移民も人種関係で大きな作用を及ぼしている。従来の白人＋先住民という構図に黒人、アジア人が追加されてきて、ますます複雑化してきているのが現状である。民族と人種の区別や定義をする研究もあるが、それについては割愛する。

コロンビアの人種構成

コロンビアの人口について、1772年、1852年、1965年、2007年のコロンビアの人種構成[(3)]を比較してみよう。

種類・年号	1772	1852	1965	2007
メスティソ	52.1%	42.3%	58.0%	39.0%
白人	19.0%	19.0%	20.0%	37.0%
先住民	21.2%	17.8%	1.0%	2.0%
ムラート		11.8%	14.0%	17.0%
黒人	7.7%	3.4%	4.0%	4.0%
クォーター		1.5%	3.0%（サンボ）	1.0%（サンボ）

ご覧のように、少しずつ各人種間で混血が進んでいる。2007年のメスティソの割合が減ったということは、推測ではあるが、自己申告の時点で先住民の血が何世代か以前に入っていても、「白人」と回答した人が多かったのではないかと考える。

移民と他の民族グループ

18、19世紀のアフリカからの流入。これはカリブ諸国を通してコロンビアにも大きな影響を与えている。19、20世紀にはドイツ人やイタリア人の移民がアルゼンチンやチリに渡り、同時期において、アジアからも中南米への移民が行われた。コロンビアでは今年日本人移民90周年である。ただ、コロンビアの場合は、ブラジルやアルゼンチンなどと比べて移民の数はそう多くない。

特筆するのは、アラブ人（シリア、レバノン）が19世紀末頃、またユダヤ人が17世紀頃から移民していることである。ラテンアメリカに一攫千金を狙う独身者が多かったという。現在約250万のアラブ系の人がコロンビアに在住している。[(4)]

微妙な差別

コロンビア第3の都市カリでは、学校（幼稚園～高校）で学費が1位、2位を争うボリバル学園とブリティッシュ学園にはほとんど有色人種（黒人系）の生徒はいない。近年はそうでもないが空港では白人が多く、バスターミナルはやはり黒人系が多い。つまり上層階級は白人が多く、中流、下層に行くに従って有色人、黒人が占める割合が多くなっているのが現状である。もちろん法律は平等を謳っている。人々も見かけ上は「肌の色での差別は存在しない」と装っている。が、昇進、給与、進学率ではあきからに白い方が有色人種より優位な社会がコロンビアの現実である。その一例を挙げると、肌の色の違いによる子供の教育年数である。コロンビアにおいて、黒人系は6.76年、ムラートは7.52年、メスティソは8.72年、白人は9.28年である。[(5)] これは未成年者（18歳）の教育年数だが、ちなみに日本は憲法第26条第2項の規定を受け、義務教育の年限を9年と定めている。が、最近では未成年の定義も変更の過渡期にあるので、二つのケースの比較は難しいと思う。

［註］

（1）国本伊代・中川文雄編著『ラテンアメリカ研究への招待』新評論、2005年、40頁。
（2）Simon Schwartzman, 'Étnia, condiciones de vida y discriminación,' *Capítulo II* Vol.I, 2008: p.2.
（3）https://es.wikipedia.org/wiki/Etnograf%C3%ADa_de_Colombia.
（4）https://www.portafolio.co/tendencias/bienvenidas-diferencias-celebrar-multiculturalidad-75074 (Portafolio, Unicef).
（5）https://www.researchgate.net/publication/320461630_Diferenciales_de_ingreso_por_el_color_de_la_piel_y_desigualdad_de_oportunidades_en_Colombia “Diferenciales de ingreso por el color de la piel y desigualdad de oportunidades en Colombia”.